

歡
喜
光

如來歡喜の光明に

我等が苦惱は安らぎて

禪悅法喜微妙なる

喜樂極なく感ずなり

歡　喜　光

歡喜光は感情を解脱し融合し眞我の中に安立し靈福を感じしむる光。

宗教生活の中心點。自己に最も深密なる本體の心髓に集中して如來を自己のものとする宗教機能は心理活動中最も眞隨なる感情にあり。

智力的實在は如來を全く我がものとするに非ず。正しく恩寵が心情に親炙し自己の血肉も恩寵による精神生命として宗教生活す。

溫暖と熱中との心情により新鮮なる活氣も之より生じ、己が罪惡を悔ひ苦悶に耐へずして投歸没入し、甚深の悲壯に身を犠牲にし奉事する如きは悉く感情なり。宗教生活最も甚深なる深密にして活動の原動中心は悉く感情なり。

感情信仰に消極方面。

宗教は解脱を要す。感情的信仰に解脱すべき性能は苦惱と罪惡。之を苦諦集諦と云ふ。人の天性は

顛倒の幸福主義にして苦不淨不自由無常なり。自己の天性に對して主我幸福主義なり。世界は我に目的を達せしむる恩愛なるものとし、恃む幸福は甚だ獲がたし。身を快美の器と想ひ世は幸福を與ふるものとし、己が心意は常規なるものとし、天則を我が自由なるものと想ふ。豈圖らんや、若し食色を快美の器とせば身を害し命を失す。世に享受する處は八苦競ひて幸福の目的を阻害す。感情なるものは縁に隨ひて轉じ、己に順ずれば貪り逆へば憤怒。嫉忌、懦弱、憎惡等、喜怒哀樂、風に隨ひて動搖し常規あるなし。自由ありと思ふもの一もなし。見よ己は天然に規定せられ、身の大小及び性質の如何等すべて自然に規定せられ因果に約束せられて自由なるものに非ず。然るを顛倒して自ら主我幸福を主義とす。哀れむべし。三苦は生物世界を通じて逼め苦しめ、八苦人間を悩ます。三苦とは苦々、壞苦、行苦にて、八苦とは生、老、病、死、哀別離、怨憎會、五陰盛、求不得、是なり。

宗教の解脱の動機は苦を感知するにあり。教祖佛陀老病死を觀て世の非常を悟り、自己及び一切衆生を此の天則より生死の關門を如何に脱せしめんとの意識より解脱の道を求む。

佛教修道の階級四聖諦は初めに苦を知り、集を斷じ、道を修し、滅を證す。即ち苦諦に苦を知りし後に、集諦即ち罪過解脱の要を感ず。宗教意識發達したる後に罪過感情起る。罪過感情は義務道德即

ち神の聖意と自己の我意行爲との齟齬するより生じ來る。罪過感情は善を欲し神意に協合せんと欲求するより起る。善を實現せんとするも安逸の爲に萎靡し意志縱逸は目的に背きて不善に流る。

如來の光明は罪惡を感知し目的に齟齬するより益々煩惱を嫌忌するの感情となる。罪惡の根本は煩惱なり。煩惱の種子潛伏し顯動すれば罪惡となる。

苦　　と　　惡

苦惱は人生に除くべからざると共に罪惡の根柢なる煩惱は人生にまた斷盡すべからず。煩惱裏に伏し外に惡の誘惑物充滿す。

天然の人には苦惱に對する感情なきも、宗教意識開發せしよりは苦は罪惡の結果なるを識り、斯の宗教意識既に開けて自己の罪の報として斯の苦果は遁るべからざるを識る時は、苦に對する感情より還つて罪過感情が昂まる。萬劫修行實難續。一時煩惱百千間。また縱使千年受五欲、增長地獄苦○因、貪瞋十惡相續起、豈是解脫涅槃國。

主我と幸福主義は自ら解脫するを得ず。全く主我幸福は人生の幸福の爲に顛倒して故に苦惱を感ず。人性の眞理を悟り顛倒的幸福主義を脱せば理想に於て惡惱解脫せん。

罪過即煩惱種子は現行と共に自己の力にては解脫すべからず。天然の人は主我の外に眞我あるを發見することを能はず、故に主我を脱する理あらざるなり。

如來の恩寵によつて解脫す

主我の世界とは苦と罪惡との性にして、之を脱せんには自己の機制我を超えたる眞我、世界の根底たる絶對は即ち如來なるを以て、是に精神依屬を求むるに非れば解脫望むべからず。機制我は罪惡の伏する處、世界は罪惡の動機充滿して天然の我と世界とに解脫得べき理なし。

機制我と超天然との客體は即ち如來の眞我にして、絶對觀念の中に如來の眞我を發見す。我を如來の眞我に没入したる時に如來の外に我なし。入我々入、三密相應す。

妄我を如來の智願海に没入したる所、天地坐斷。東坡が如投水海中、如風中鼓橐、生滅々盡處、便我與佛同。

相待生滅の世界を超えて絶對不變の如來に歸し機制生死の我を脱して無規の眞我に融合す。こゝに於て生死の源を斷ちて不生不滅の涅槃に入り、罪惡煩惱の我を捨て如來の目的なる大菩提に參與す。絶對に依屬せるが故に生死を超えて涅槃の地を得、眞我の菩提に歸命せるが故に道德の自由即ち自律を觀念(す)。

投合せし人の心情

感情を宗教の中心とすれば如來の眞我に投合するは恩寵の眞髓なりと云ふべし。如來の恩寵によりて解脱する信仰に、自己の罪惡を苦悶し娑婆を厭惡し、是れ自己の力と此の世界の及ばざる處なれば、解脱の感情は益々切にして、全心全力を以て我を如來に投歸没入して如來の恩寵を仰ぐを歸命と云ひ、我を厭ひ恩寵を仰ぐの情昂進せし高點なり。其の信仰の最高潮によりて如來恩寵と投合する處即ち融合なり。

其の心情三昧神秘の状態は言語の及ばざる處、融合神秘の心情は宗教最深の源底、宗教生活の活氣

は是より生ず。最も深遂にして幽玄。

三昧、入我々入、三密相應、即ち神人合一の神秘的機能によりて聖靈の子を生ず。

神 人 交 感

楞嚴に定光發明して明性深く入り、如來の氣分と交接して慈光を稟け如來の中に安住す。猶し雙鏡の光明相對するに其中に妙影重々相入するが如し。心光密かに廻して佛の無上の妙淨を獲。心中の發明、淨瑠璃瓶に精金を盛るが如し。心情佛と融合し如來の氣を稟ること、中陰の身自ら父母を求むるが如し。陰信冥通、如來の種に入り既に道胎に遊んで親しく覺胤を奉ること胎兒の人相の缺けざるが如し。容貌佛の如く心相同じ。身心合成日々増長し十身靈相一時に具足す。聖靈の形を成し胎を出でて親しく佛子と爲つて法王子と名づく。

神秘融合神人交感によりて覺胤をうく。聖靈交感の心情を譬喩的に説明したるものとす。安立は已に融合してより情操一變し從來の機制我に非ずして如來眞我の中の我として情操眞我に安住す。已に

生死の關門を超えて高く乾坤を脱出して生死の表に出で、高く如來の中に安立する情操は生死の恐るべきなく八風の爲に動かされず。

聖經に佛陀が如來の福音を宣んとするに先ちて如來に融合安立せる心情を表はして爾時世尊諸根悅豫姿色清淨光顏巍巍たり、明淨なる鏡の影表裏に暢るが如しと。如何なる境遇にも姿色不變、光顏異なることなきは心情の融合し、安立の相なり。

歸命は感情、融合は心情、安立は情操に配す。

感情的信仰

感情は人の心理作用の中最も觀念の度の強きものにて、人の心理にあつて内容に感ずる度の深きもの。苦樂憂喜は皆感情に屬す。人心活動の中最も内容深密なる機能なり。感情必しも野にあらず。孔子は之を知る者は好む者に如かず、之を好む者は之を樂む者に如かずと。是知力に知り、意向に好む、感情に至つて樂しむ。

宗教的獨特の精髓は感情に求むと云ふが如く、客體に對する愛慕渴仰の信念も高尚なる理想も、新鮮なる活氣道德行爲の蒸氣力を發し甚深なる悲壯には自己脱却の勇を奮ひ、一切衆生の爲には身を苦毒の中に止むとも忍んで終に悔じと。

(脱)世專念の勇氣には萬乘を(舊履)の如くに脱する如きは是心理の感情に屬すべきものなり。心情宗教の發足點は佛教に教ふる所苦毒の感情をもて先とす。四聖諦の中先ず苦諦を認め、次に苦の原因

たる煩惱を退治す。

苦毒の感情は解脫宗教の發足點たりとは、人は自ら苦毒たることを認めざれば、之を解脫せんのを感ずるなし。

人の身體の病にも苦痛を感じて療治の要を感ずる如く、精神的宗教に於ても又然り。苦し感情は何より感ずとならば、天然の人は自ら顛倒して、自己の身心土は脱却せざるべからざる理性あるを識らず、顛倒して自ら苦を感ず。即ち四顛倒を根本とす、身は本空なるを實有と謂ひ、享受するものは唯快樂幸福のみを望み、心は無常なるに常住と謂ひ、法の無我なるを自ら自在なりと謂ひ、自ら顛倒して主我幸福のみを追求め、名利權威求むるに隨て〇り。榮耀快樂は陽炎の渴望に空しく苦しむ。哀むべし衆生快樂主義幸福主義に常に満足の感情あるなし。

榮華の夢久しからず幻の快樂唯愚夫を惑はすのみ。此の身は苦の本加ふるにまた身心の苦を受く之を苦と名づく。天然の人は顛倒によつて幸福主義却て苦毒の感情甚だ多し。身心土悉く苦毒の感あらざるはなし身心に受る處憂悲苦惱のみ。

次に超然主義は曰く此三界即ち世界は苦毒充滿の處實に厭ふべし。世界は苦毒なり怨敵なり蛇蝎な

りと、此世界を棄厭すること甚し。身は空なり苦なり、身心土とも苦毒なり空なり無常なり無我なり。此心身土を厭ひて超然たる無漏の境に超入するに非ざるよりは此苦を脱する能はず。

斯の如きの身心土は根底より脱却するに非ざれば苦を脱する能はず。無爲泥洹は身心共に滅して初めて寂滅爲樂とは是小乗が執する苦毒と解脱なり。同じく超然主義の進みたるに苦とは天然の衆生は迷に仍て苦を感じず。苦の體を深く觀じ來れば空なり幻華の如し。夢の中に苦と感ず、覺め來れば苦を感じずべきなし。元生死の苦なし何の處にか涅槃の樂を求めん。生死涅槃は只昨夢の如しと認むるは空宗の執する處。進んで生死の體元涅槃常住絶對眞心の體なり。この世界及び身體と個人精神とはこの絶對理性の根底に立てり。この身心土には共に脱却を要すべき素質を有せり。然るに天然の人は脱却の要を識らず、故に自ら主我を執し幸福主義も托すべからざる世界に托し、自ら顛倒して苦毒を感じず。

衆生は佛性即ち阿彌の理性を具すると共に主我を執し快樂即ち幸福主義實有なりとの迷あつて、苦毒の垢質有する所以はこれを脱却の爲の勇氣を鼓舞しこの苦毒に耐忍すべき戰爭に勝利を得せしめん爲の方便と觀する時は、苦の感すべきなし、何ぞ必ずしも世界を棄て無爲界に超入するを用ゐん。天

然の人の主我執と幸福主義と三界即世界依屬の天然的精神の顛倒を覺め來て觀ずれば、生死即ち涅槃、この生死の苦毒を感じる感情を離れて別に生死脫落の阿彌の中なる眞我の心性あらん。

苦毒の感情なければ脫苦專念の勇猛を生ずるなし。また一切を度せん爲には、忍終不悔の悲壯の甚深なる感動を生ずるなし。一切享受する處に常に情を充しめば、世界の依屬を脱却して大我の中に超入すべき動機なからん。苦中の耐忍によりて剛毅をきたえ憂怖によりて無生忍の必要を感じ、天然の身心土を脱して阿彌の中なる自己たることを感ぜば苦毒即ち眞正の靈福たるを感ぜん。世に苦毒の感情なかりせば健士即ち菩薩の理想的活動すべき材料なからん。苦あつて始めて菩薩の利他大慈悲の價値顯はる。一切衆生の苦毒は之大悲の菩薩を養成する處の資本、阿彌の恩寵を莊嚴する處の金箔といはざるべからず。

煩悩 罪過感情

衆生に苦毒の感情の因となる罪過衝動たる煩惱なる惡賊ありて道德を害す。菩提心發現すれば自己

の苦毒は忍ぶべくも道德に阻害する煩惱とそ力を竭して之を脱却せざるべからず。

貪戾慳悋愚痴憍慢嫉忌恨反覆惱苦等が内にあつて縁に歷れ境に對してややもすれば發動して自ら害し且つ他を害し、外に六賊ありて内面の德義を害せんとす。如此の煩惱と罪惡とはまた宗教道德的情操發せざる程は未だ苦悶とするに足らざるも、已に菩提心發しぬれば内に菩提心の光ありて之を反照するときは忍び難いかゞせば斯の如き罪惡を降伏すべきやと。

罪過感情に於ても、天然の人は罪過は苦毒の如くに感ずるものに非ず。菩提心發さざる程は罪過を照す光薄ければさほどに感ずるものに非ず。

超然主義

此煩惱に對し小乗の聲聞等は主觀的のものと感じ、人は三界生死の苦は見思の煩惱により、煩惱の因を斷ぜざるよりは煩惱の水源を杜ぐなし。意志を斷ずるに非ざるよりは煩惱を斷ずる能はず。自己の苦を脱せんが爲に自ら罪惡の源を杜ぐ。而して煩惱は實に煩ひ惱なり實に斷滅すべしと。

次に大乘空宗には煩惱即ち罪惡も苦と同じく、煩惱本より虛妄にして昨夢の如し。夢の中に人を殺す加害者も被害者も共に夢なり、何の處に罪あらんとは、超然主義の罪過に對する解なり。

今は、衆生煩惱の本體を能く推窮むる時は即ち是菩提の性なり。天然の人は自ら惑ふて菩提を以て煩惱と爲す。阿彌に對し罪過甚だ深重なりと云はざるを得ず。一々の煩惱を轉ずれば即ち菩提なり。吾人は阿彌の理性を具有しつゝ、自ら愚に煩惱の奴隸とならば、理性を統一せる阿彌に對して犯罪者たり。天然人の如き他律的の世間の律法の制裁に對する罪尙輕し。自己の理性を統攝せる阿彌に對する罪甚だ重し。自己内面の阿彌の聖意を瀆す罪深し。阿彌の理性たる菩提を自ら惑ふて煩惱と爲す。天然の人は感覺欲即ち色欲の如き聖賢を愛し道德を愛するの誤用なり。我慾轉ずる時は度衆生利物の欲望と成らん。何ぞ非理の憤怒の勢力を己が不正を斷伏するに用ゐざる。何ぞ懈怠を罪惡に用ひざる。煩惱即菩提、汝は貪瞋の心性を斷除して菩提を欲望し正義を徧るの意志あらん、貪て飽くことなかれ。上求菩提下化衆生。奮激して怒せよ自己の斷惑の爲に。即ち知る煩惱即菩提なりと。

苦毒と煩惱との關係

苦諦は果にして煩惱業即罪惡は苦因なりとは是迷界因果律なりと。必しも因果と云へば、時間的に

貪欲に貧の苦果、殺盜に短命貧窮の苦報の如きの關係は證明せざるも、貪欲主我には精神的貧苦遍られ、瞋恚家は自己の胸中の獄火に惱害せられ、殺生偷盜邪淫も良心の苦悶は決して免れ能はず。貪瞋痴慢等の如き惱は是苦惱の元因たることは否定すべからず。

歸する處一切の苦苦壞苦等も皆之を苦と感ずるは元煩惱による。惑は顛倒より主我と幸福主義たり幸福主義は決して満足の感情を安立すること能はざるものなり。人は苦毒を厭ひて之を離れんと欲するも、生の苦惱は苦の元因たる煩惱を脱却するに非ざれば決して離るゝこと能はざるべし。病を癒すに非ざれば苦熱は除き難く人には煩惱の病よりすべての苦惱の熱を發す。煩惱の源動たる主我は肉により主我衝動より一切の煩惱を發し、この主我と幸福主義の惑あらん、六塵境に對し緣にふれ思はずも罪に墮る。

自ら苦悶す

いかゞせん天然の人自ら苦悶を去り罪過を脱せんと欲するも自己の力の及ぶ所に非ず。惑業の薪あ

らん限りは煩惱の熱火消滅しがたし。導師曰く、萬德修行實難續、一時煩惱百千交、若待娑婆證法忍、六道恒沙劫末期、貪瞋卽是輪回業、煩惱豈是菩提因、此貪瞋火燒苦を驗するに、去つて彌陀國に入らんには如かず。

一食の時尙餘あり、如何萬劫貪瞋せざらん、貪瞋は人天の路を障ふ、三惡四趣内に身を安く。

若し娑婆の證法忍は、娑婆には卽世界依屬の主我、主我にてはとも罪過と煩惱とは離るゝことはざるべし。主我と幸福主義は如何にしても苦毒と煩惱とは脱すべきに非ざれば、この自己精神の立脚地卽ち主我を轉ずるに非ざるよりは離脱の道なかるべし。人には之を脱離すべき理性の精神と絶對精神との性能あることを知り、この眞理に依るにあらざるよりは決して自己の力の能はざる處。

阿彌に依つて解脱

身心土に於て脱却轉依すべき理性あることを知らず、主我心、快樂主義、身は實有、天然顛倒なり。主我は轉依すべき理性あるを識らず。世界は畢竟して依屬すべきに非ざることを悟うず。いかゞ

せん煩惱と苦毒とは是衆生の顛倒より起る。所謂實有に非ざる身を實有と謂ひ、幸福快樂を受くと謂ひ、主我を計し常住と謂ひ、依屬に耐兼ざる世界に依屬し、自己の顛倒いかゞせん脱せんと欲するも惑除き難し、覺せんと欲するも顛倒さめがたし。顛倒以て自己の心とし、衆物素もて身とし、有爲の世界に依屬したる身の果報之を轉依するに如かじ。轉依とはこの天然の身と心と世界とに、この主我を超え天然を超て、絶對の阿彌の眞我の中に眞の自由を求む。所謂肉團心にあらず天然の賴耶を超へ、絶對なる眞神即ち阿彌の中なる自己なることを發見し絶對無限の自己なることを意識し、楞嚴に所謂肉團心を脱し賴耶を越て、超然として獨朗天真阿彌の心體現前、自己同一の心體現前する時、即ち十方微塵刹土も眞心中の一分たるを、從前の我を無限の中に投じ無限の恩寵こゝに顯はれ、入我々入、肉團身の自己を阿彌の無限の眞我の中に投じ、此時に從前の自己は主我を脱し、東坡の所謂、已に一念より生じ又一念より滅す、生滅の主我滅盡時、即ち我佛の大圓覺と同じ、水を大海に投ずるが如く、風中に橐を鼓するが如く、盡空界に自己を求むるに自己なし、身心脫落して洞然蕩々已に絶對の中に亡じて、長く三界の苦輪を離れ、忽ち大我の中に活眼を開く、十方を觀見すれば曾て依屬し來りし世界一切微塵の刹土は還て是眞我の中の塵々なるを覺ゆ。

巴に阿彌の中たる自己たることを意識して主我亡じたるも、夫れのみにしては未だ阿彌の中に活動するに非れば未だ更生したる聖子にあらず。

法喜禪悅

聖典に如來の光明は遍ねく十方の世界を照して念佛の衆生を攝取して捨て給はずと。

意は如來の光明は普遍に照し亘れども、殊に如來を念ずる人に御心が感應融合して攝受し下さると云ふことである。善導大師は此意を衆生行を起して口に佛を稱ふれば佛即ち之を聞き給ひ、身に禮敬すれば佛即ち之を見給ふ。心常に佛を念ずれば佛即ち之を知り給ふ。衆生佛を憶念すれば佛もまた衆生を憶念し給ふ。彼此の三業相捨離せず故に親縁と名づく。如來は私共の大御親にて私共は其の子である。親と子との心の融合して、而して如來の強き力にて私共の靈を育てゝ靈化して下さるのである。

さて大御親に常に衆生を救ひ下さる慈悲の光あるならば何故に私共に分らぬのであらうと云ふ疑が起る。そは肉體でも赤子が初の程は母親の容(かお)が見えぬのであるが漸に形體が發育に随つて母の容を見て悦ぶやうになるもので、又私共の肉體も初母の乳にて養はれて成長すると同じく心靈も矢張り

同じ形式に信仰心が育つて行くのである。

然らばいかにして信仰心が出来またそだつて有らう。そは赤子が初めて産聲を揚げた時には母の容は見えねども、啼く音を便りに母の方から乳房を含ましてくれる乳を吞むから次第に成長する。私共の心靈も光明名號の眞理を聞き、如來は全く私の靈の御親であると確かと自覺した時は、恰ど靈の子が生れたので、眞から稱名の聲が發する様に爲つたのが心靈の産聲である。名は稱ふれ、まだ如來の慈悲の御顔は拜めぬけれども、稱名の聲する處に大御親の靈の乳は與へて下さるのである。念佛心に心光の乳は感受るので、それが靈を養ふのである。如來を念じて止まざる時は、心靈が益々發達して慈悲の溫容を拜めるやうになれる。また常に御慈悲の懷の中に安住しつゝある身であると思はるゝ。

如來の恩寵に信仰心も育てられ、何時も懐しい親様と寝ても寤めても共に在つて離れぬ様に想はれる。そうすると此の弱き私共の心の生活にいかに力を得るか量られませぬ。而して肉體も命のある限りは日々の食糧なくてはかなはぬ如く、心靈の信仰の命も靈の食物がなくてはなりませぬ。一心に念佛して如來の恩寵を被むる、然すると靈感をえて常に靈が養はるゝのである。心靈の法味即ち信仰心

に感受る糧に二種に分つて見ると、一は法喜と云ひ、一を禪悅と云ふ。

法喜を得ればどういふ感じがするとならば、眞に信心が成熟して靈が開發したる上は、從來とは心機一轉して靈の曉となり、夫からは氣分は快廓浩蕩（ゆたかにひろびろ）して天地も一變した様に思はれ、溫暖なる和氣に麗はしく櫻花の笑める如く靈氣のこめたる中に心の花開きて常磐の春の長閑なる氣分となるを法喜と云ふ。

次に禪悅と云ふのはまた三昧樂とも云ふ。これは一心に念佛して無我の境に入ると、如來の恩寵と自我とが神秘的に融合する。この時の得も云はれぬ悅樂を感じる時の靈味である。法喜も禪悅と同じく宗教心に感じ得らるゝ妙味で、神ミを養ふ心を快活にし、また心ひろく體ゆたかにならしむる感情上の興感である。

生命のある活ける信仰はかゝる微妙の味ひを以て養はるゝが故に、活動の原動力とも成るのである。世の人、肉體には和洋の料理に美を味ひ口腹を恣にするも、心靈に極りなき靈味を感じるなき爲に終身肉の奴隸たることを免れぬ者が多いのである。

かかる妙味を以て心靈を養ふ靈的生活に入るはいかに幸福でありませう。實に斯様な生活に入るに

非ざれば、眞に人間の身を受けしかいはないと私共は信じます。

みなさんよ。自己の心靈が如何なる聖き食を以て養はれつゝあるかを省み給へ。實に日に三度の食よりは尙尊き靈の糧を求めて心靈を養ひ、清き生命となり、今此の現世を通じて永遠の生命を保ち、清き御國の人となられんことを御勧め申します。

法　　喜

法喜は法悦とも云ふ。是は已に信仰の生活に入りし人の感情的の心理状態である。人は心靈開發する時は心機一變し、未開の人は心の生理的の機定に閉塞せられて自然に不靈福の状態である。未開の心理は恰も開くべき花が未だ開けざる時の如くに、苦慮するの因もなきに苦慮し、恰も味蒙素朴の人は貴人に對する時は俗に云ふハニカムと云ふ如くに、大なる如來の中に在りながら神心は開發意解せざるは是常人の自然なり。人は靈性具有すれ共開發顯動せざる間は例へば金剛石の未だ琢磨せざる時の如くに不靈福の状態である。若し人一度念佛三昧の功果として心靈が融化する時は、心情の状態が

平和に心寛く體胖かに、狹き一室に閉塞せられたる人が廣き天地に開かれたる如く、靈的氣分が内に充ち如來大慈の光明の裡にある狀態恰も陽春和氣に花開き麗はしきを呈し馥郁として香を流すが如く、歡喜内に滿ち靈感極まりなし。此靈的氣分を法悅と云ふ。

常に平和に斯の如來大慈光明裡に生息する心は歡天喜地常盤の春永へに靈感極りなきを感ず。已に開發する時は心情自己が靈福態と成りし人なれば此心情を以て萬物に待せば萬物皆悅を以て我を迎へ、鳥歌ひ花舞ひ、同じ花月を眺むるにも自己の心の靈妙態と爲りたれば、花も開く希有の色、月も眞如の光を放ち、萬境悉く靈象ならざるはなし。若し爰に至つて釋尊が自己の靈的經驗より證明なされた經、例へば阿彌陀經に彼佛の國土には常に天樂を作す、黃金を地と爲し、晝夜六時に曼荼羅華を雨らす、等の文々句々悉く自己の靈が共鳴して淨土の樂地自己の心に實感し顯現す。故に自己の靈性活動し來つて淨土の經典を播く時は、經の文々句々悉く活きたる淨土の莊嚴が自己心眼の前に實現し來りて、昔數千年前の說法は我眼前の靈境界となる。

亦人は例へば人の非常に歡樂を感じべき境に臨んでも内心に悶ゆる時は歡樂を感じざる如き、經に謂ゆる昏朦閉塞して愚惑に覆われ、惡氣窈冥にして妄に事を興すとは、是矇昧なる人の心理狀態であ

る。經に無量壽佛が七寶の講堂に於て大衆の爲に法を宣給ふ時に道教を宣暢し歡喜せざるなし、心解得道し歡喜無量、即時に四方より自然に風起て普く寶樹を吹いて五音聲を出し。無量の妙花を雨して風に隨つて周徧す自然の供養是の如く絶へず、一切の諸天皆天上百千華香萬種の伎樂を齎して其佛及び諸の菩薩聲聞大衆を供養す、普ねく花香を散し、諸の音樂を奏し、前後に來往して更るく相開避す。斯の時に當つて熙怡快樂勝へて言ふべからずと。斯の如きの文字も若し能く自己の靈性開け來つて看る時は決して形容の詞にあらずして全く高等なる宗教心の實感すべき靈境なり。

自己に歡喜光が自己の心情中に融化する時は釋尊實驗の説の如きは實に唯共鳴するの外はあらずして自己の靈心に現前する機會ならざるはない。また唯佛陀心靈實驗の談を以て自己の靈性の感鳴するのみに非ず、宇宙一切萬有悉く如來の法身の顯現にして何かは法悅の感を動す機會ならざるはなし。鄙にも都にも、例へば人が自己胸中に一物なく、萬物見る物聞く物として樂からざるはなしと云ふに、樂しみは人間の造りたる大都會の中に演出する快樂もまたすべて都會の娛樂は多くは人工的である、廓大なる建物の中に眼を眩暈し耳を悅ばしむるものを以て人に歡樂を與ふ。然るに田舎山村僻邑の地に至れば山に水に自然の美天然の風致また人工の及ばざる趣味あり此中に亦自然の樂あり。

然るが如く淨土の一切五妙境界の美觀は佛智所成の顯現にして其美微妙奇麗なる亦言思に絶したり然れども娑婆の自然の風致は是法身の顯現にして、一切萬物の中に自然界をなし風趣を供ふなり。是恰も田舎の如く、若し夫れ自己の心靈開發し彌陀の靈に醒むる時は、娑婆は娑婆としての法悅を感じべき萬境なり。淨土は淨土として五妙境界の微妙莊嚴ならざるなし。此らはすべて法悅の状態とす。

禪 悅

三昧樂とも云ふ、心靜なる定中に深く內的靈感の感情に於て感ずる心狀。定中の微妙なる喜樂を感じず之を禪悅といふ。禪定に入る時は初め種々の覺觀が交々現前して、心境冥合し難し、漸々心が微に入り細に動き徐々と進行する時は、種々の覺が生ず。覺とは定中の龜相の念にして、彌陀を念するに彌陀を専ら思想觀察する龜念なり。即ち想像を以て彌陀を念するなり。觀とは徐ろに微に入り細に亘りて彌陀を念するに在るが如き、（註 以下斷絶）

歸命 融合 安立

歸命

歸命融合安立の相を明さんに、衆生は天然の主我には、煩惱深うして底なく、生死の海邊りなし、苦を渡るの舟未だ立せず、云何ぞ樂で睡眠せん、勇猛につとめ精進し、心を攝して常に禪に在れ。云何せん、天を仰ぐも地を俯すも、惡魔の充滿せざるなく、内には煩惱五陰の魔障ありて内面の理性を障り、之を解脱せんとするも、とても自己の力の及ぶところに非ず。苦悶内に充ち遁れんとする所なく、解脱いかんがあらん。自己の心に問うも心は顛倒迷亂して主我を執し、身に托せんとするも身は是四大元素の化合物。世界は是依他規定、天地一切の處に自由の所を求むる所なし。

唯有るは阿彌絕對眞我、是世界萬物の根底、また一切の歸趣する處。阿彌に向つて投歸するに非るよりは解脱の道なし。

此天然の身心土は共に依屬すべからず。超然として絶対に歸入せざるべからず。

歸命の感情を導師觀經疏に、韋夫人に寄せて歸命の心情を露はせり。夫人自身の苦に遇つて世の非常を〇〇六道自然に安心の地有ることなし。此に佛淨土の無生を説き給ふを聞いて穢身を捨て彼の無爲の樂を證せんことを求む。夫人眞心徹到して苦の娑婆を厭ひ〇の無爲を欣ふて永く常樂に歸せんとす。但し無爲の境には輕爾として階るべからず、苦惱娑婆は輒然として離るゝことを得るに由なし。金剛の志を發するに非るよりは、永く生死の元を絶んや。若し親しく慈尊に〇にあらずば、何ぞ能く此長夜を免れん。

此文意は、この身と世界とを客觀的に離るることを欣ふ如くなるも、其實、主觀的にして、故に程なく投命して無生忍を悟れり。

今の文は歸命の情を表するのみ。斯く自己及び世界依屬を捨てゝ絶對阿彌の智願海に自己の一身を投じ、主我を眞我の中に歸命すると、忽爾と亡ず、香爐一點雪と消滅し、一念に便ち永く三界の苦輪を離れ、一超直入如來地。

譬へば日出でゝ衆闇盡く除く、佛智光を輝せば無明の夜は日に朗かなりと。

歸命投入が永く忍土の終り、心亡じ身没して、乾坤斷破す。身心土を擧げて悉く歸命す。

融合

解脱と融合は機能致一、一柱の香煙は忽ちに第一義天に昇り跡をとどめず、一掬の水は大海に投じて差別なく、主我急ち亡びて、眞我に投合し、乾坤開いて無限の眞心露現。

斯の如きの説明は理に止まりて、未だ心情の妙味なきは是れ感情融合の意ならんや。絶對と融合の狀、歡天喜地、身心融液、不可思議のさま何を以てか其妙味を比せん。

春の彌生の櫻花は霞の中に麗き色と馥しき香を發して、無情ながら天機の妙を洩して融合快樂の狀態を呈す。

神（こゝろ）三昧深秘の奥室に絶對無限の精神に融合し微妙自然の感情身心融液不可思議の（中）に深秘の内容に法身の妙容を感じ、心情には神靈と交渉し融合の妙感、最麗しく香はしく、深邃幽玄、また深秘の神靈との交感によりて、聖胎佛種子發萌して初めて聖法子と成る。

是深秘交感融合は宗教生活の泉源にして、眞の聖種薰發の〇となり、一切活動の原動力と成る。

既に融合致一、入我々入、最深の眞我の自己としては心情いつしか轉じ、この有爲の依身のあるほどは、八風のおとつれて喜怒哀樂の浪波なきにあらざるも忽ち轉ずること自在なり。

心情の眞我に融合感應せる甚深の内容は深秘の中の秘密なれば決して他人の窺ひ知るべきに非れども、教主釋迦牟尼の内容に充塞して掩ふべからざる眞容は自づと表面に發現して阿難を感ぜしめたる容は是れ元大我の無限の眞光動機に外ならず。すなはち、兩時世尊諸根悅豫姿色清淨にして光顔巍巍たり。時に阿難は忽ちに聖旨に感發せられて即ち合掌して言く、

今日世尊よ、青蓮の眸り纖月の眉丹果の唇笑みを含み給ふて皎雪の齒を露はし、諸根に悅豫あふれ、金の色清かにして光顔巍巍たり、明淨なる鏡の影が表裏に暢るが如く、威容顯曜にして超絶し給ふこと無量なり、また曾て御麗しく殊勝なる今日の如くなるを瞻たてまつりしことあらざりき。されば大聖我が心に念言すらく、今日世尊は内容に奇特の法に安住す。世尊よ、弟子等大聖を念思し上れば歡喜内に悅豫して自ら表に現はるゝ如く、たとえ世尊といへども亦他の如來を念じ給ひて其投映の内容が表に露れて斯くは在らせ給ふに非すや。何故ぞ威神の光々たる乃ち爾るやと。之は教主牟尼尊の感應したる阿彌に非ずや。曦光の流彩無心にして十方に朗かに、阿彌の内容は絶對にして萬法を含み法界に周し。心華開くきは孰か感せざらん、孰か融合せざらん。

華嚴に如來甚深境界其量等○一功衆生入而實無所入。

安立

主我超入して大我の中に融合したる状態は機能致一、内に非ず外に非ず中間に非ず絶対無二。是よりは大我の中に安立して表面には個人なるも内面は絶対致一。阿彌の中の自己としてより従前の自己とは更轉して所謂變易の心歡喜の光に内容が充され平和安穩にして自然の靈福感ず。八風眼耳を通るとも、内容阿彌の中に碇泊し、六賊競うて來りて侵害せんと欲するも阿彌の城郭に安住して怖るゝに足るものなし。

阿彌に安立せる精神平和の靈福歡喜といはんか安寧といはんか、しばらく喩を以て其狀をのぶれば、即ち機能致一の状態は、譬へば天の如し仰げばいよ／＼高きが故に。猶し春日の如し、暖和にして能く化育するが故に。秋月の如し、清涼にして煩惱の熱を除くが故に。猶し大海の如し、廣蕩として無邊の故に。山王の如し、八風の爲に動搖せざるが故に。雪山の如し、情操皎潔の故に。浩氣の如し、新鮮なる活氣を與えらるゝが故に。猶し大地の如し愛憎なく公平の故に。帝王の如し、神聖の命令性の故に。判官の如し、情操を判じて正義ならしむるが故に。淨水の如し、感情の弊垢を洗除するが故に。火王の如し、一切の垢質を燒滅するが故に。蓮華の如し、世間の汚泥に染まざるが故に。大

乘の如し、一切を重擔として生死を出るが故に。虚空の如し、世界に依屬せざるが故に。猶し雷電の如し、未覺を覺するが故に。梵天王の如し、善法に最上の故に。獅子王の如し、畏るゝ所なきが故に。象王の如し、善調伏するが故に。大地の如し、一切の功德を生ずるが故に。大宮殿の如し、心安住するが故に。城郭の如し、六賊に害せざるが故に。

人生の幸不幸と歡喜光

人此世に生れ此世をして幸福ならしむるとまた不幸ならしむるものは其精神いかにあり。人生の快活なると他は暗憊的憂惱の方面とを取るあり。眞の幸否は外界の周圍の境遇よりは寧ろ各人の精神に在つて存せり。

敎祖釋尊王宮榮花の夢はかえつて憂鬱の動機にして、三衣一鉢樹下石上にして眞の幸福を發見したる如きは凡人の得て學ぶべからざるものと云ふべからず。釋尊王宮に在つて深く憂鬱に耐えざりしは五欲の豐饒其ものにあらずして未だ精神に斯の光明を發見せざるが故なり。樹下石上に於て眞の幸福

を感じたるもまた然り。樹下石上必ずしも人生の幸福と云ふべからず。眞の幸福を得たるは外界にあらずして精神に於て發得したるなり。釋尊心靈に於て無限の光と永遠の生命との中に妙樂世界を發見したり。無限の幸福は此永遠の泉源より感ずることを得。

いかにして光明を得べき。

人が世に處して成功する所以のものは其才能によるが如く、其氣質によることまた大なり。然るに此氣質なるものに人間の性情の平均の調和宜しきものは、自からいかなる境遇にもよく安忍し、周圍の人に對しても鄭重と親切を以てするなれども、其氣質によりて生得の調和宜しからざるものも、其自己の氣を如來光明によりて溫められて靈化する時は氣品を轉してよく調和す。

光明方面の人

光明方面に向いたる精神には一切世間の事物に對して一種の歡喜光を見出すべし。かゝる人はいかなる大不幸の中にも安慰の光明は心の奥より放たれ、また大失敗の中にも成功の日光映ぜるあり。彼等の目にふるゝものは一として歡喜光を放たざるなし。不幸を轉じて幸福と化し失望の闇を開きて希望の光となすものは蓋これ歡喜光なり。

光に向ふ人は常に燦然たる光輝に輝き光々たる姿色容貌に現はれ愉快々活、歡喜の光は心中に離るゝことなし。いかなる場合にも麗しき色を變ずることなく、其心は光明を以て色彩を飾れり

光明に向ひたる人は雄大にして快活なり。黒雲暗憺たる中にも道德的光明を認め、たとい眼前の不幸にも將來の希望を信じて快然たり。聖法然が七十餘歳の高齢に臨んで、一旦念佛弘通の爲に種々の迫害に遇ひ土佐國へ遠島せらるゝに臨んで神色自若として我年來都會の化導すでに久しく邊鄙の教化を志したりき。幸にして年來の宿願を果すも朝恩なりと宣ひし如き、實に快然たるにあらずや。

光明に圍まれつゝある身には不平と不滿の闇は容るべくもあらず。失望落胆は夢にだも見るべくもなし。まことに光明方面に向ひたる人は眞の幸福は相伴ひて離れざるなり。

歡 喜 光

苦惱と罪惡との苦悶は恩寵要求の動機

二種求道動機

自己苦惱觀
自己罪惡觀

感情信仰

歸命
融合
安立

光中の眞心妙樂

法喜
禪悅

歡喜光の五

